



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

小泉, 誠

CITATION:

小泉, 誠. まえがき. 技術室報告 2001, 2

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233220>

RIGHT:

まえがき

技術室長 小泉 誠

今回発足した技術室報告第2号の【技術報告】は、日頃研究者との連携で行なわれている技術支援を通してまとめられたものであります。防災研究所の特色である自然現象の観測や実験が中心で、長期に及ぶ観測や短期で終わる実験、測定ならびに計測器の取り扱いに関するものになっています。とかく文章書きに不慣れな技術職員にとっては、第1号の発刊を見て来年以降に投稿を延ばしたためか昨年より多くの技術報告が集まりました。研究者とともに研究プロジェクトに取り組む場合、ややもすると技術支援が終わればそれはそれで終わりとなり、また次のプロジェクトの技術支援に取り掛かるといった具合に、技術職員の役割をじっくり客観的に見つめることが少なかったように思われます。行った技術支援をきっちり文章化することによって少し曖昧でわからなかった事象や再チェックが必要な箇所あるいは新たな問題点などに気が付くことがあります。定形型の仕事ではなかなか技術報告を書くことは難しいですが、それでもたまには文章化して見つめ直す必要もあります。研究プロジェクトは期限があり、その都度自己の役割に応じて何らかの技術報告が書けるのではないかとされると同時に書くべきと思います。教官は研究成果を発表され、技術職員は技術報告が書けるものと思われれます。技術支援の過程で失敗したことがあれば、それはそれで貴重な経験であり、他の人の参考にもなるので紹介できるものはしてもいいと思います。このような種々の経験によって技術室報告が継続的に発行できればこれに越したことはありません。【活動報告】は1年間の行動概要をまとめたもので技術室の記録として残していくべきものであります。まだまだ不十分なところがありますが、今後はこれに加え技術職員が携わった全業務について何らかの形で集約し蓄積できればよいと考えています。

さて2001年度を間近に控えた技術室は設置後5年が経過しようとしています。1月の省庁再編により今後はあらゆる面で改革が進むと思われれます。とかくこれまでの技術職員は研究者に対して従属的受身の体質に甘んじていたことは仕方がないところもありますが、これからは積極的体質に改善する必要があります。今後は支援要請に対してどんどん技術的プロポーザルが出来るよう組織力を用いた技術力の向上を目指さなければならないと思います。我が技術室は年齢的に高くなり技術職員自らの自己研鑽力を期待することは次第に困難になってきましたが、組織みんなの技術力を結集し、悩みながら問題解決を図る努力をすると共に、若い技術者の採用を強く望んでいます。それによって技術に関しては任せておけと胸を張れるような技術室を作りたいものです。